

地下鉄を降り、エスカレーターに乗った。

エスカレーターは、ホームに溢れた客を零れるほどに詰め込み、軋みながら昇って行く。エスカレーターの上に、もう一つのエスカレーター。折り重なった人の流れが小さく旋回し、また同じ流れとなり、無言のまま次のステップへと連なる。四十度に近い角度を、秋の終わりの蠅の唸りに似た鈍重なりズムに身を委ねながら、人々は何気ない表情を崩さない。

僕がエスカレーターに一歩足を掛けたときから、十センチと離れない目先に、蓬髪を風に靡かせている男の頭がある。ついていない、と思う。前にも後ろにも動けないステップの中ほどにあつて、自分より二十センチも背の低い男と接している。

男は少しもじつとしない性分らしく、間を置かず体にくねらせ肩をいからせ首を振る。その度に、絡み付いた蓬髪が揺れ、煎じ薬に似た臭いが鼻を衝く。僕は込み上げてくるくしゃみを懸命にこらえながら、男の後頭部から目を逸らさない。

僕には、前額部から左頬にかけ、ひきつれの痕がある。

数回の植皮手術を経てかなり矯正されているが、それでも人目に付かないほどに回復するまでには至っていない。頭髮も生え際から三センチほど後退しており、前髪を垂らしているため、かろうじて人目を遮ることが出来る。

それにしても、髪の毛の焼ける臭いというものを、ご存知だろうか。

例えば灰皿の中で、一本の髪の毛にマッチの火を近づける。すると薄い煙を引き、縮み上がる。ちりちりと脂のはぜる音。肉質のものの炙られる濃密な臭い。それは肉を持つものが骨灰に転じるとき臭いに似ている。

男が母を殴っていた。母は殴られるままに、蹲っている。「俺をさんざん利用するだけしやがって」

男は酔っていた。「淫売め。売女め」と喚きながら、拳を母の頬や鼻柱めがけて振り下ろす。夜明け前だった。障子から射す薄明かりの中で、男の影が躍り、母を打ち据えた。血の臭いがした。焼酎のむかつく臭いと血の臭いが入り混じり、部屋の空気は醜えていた。

男がマッチを擦った。薄闇に不精髭の伸びた、顎骨の高い男の顔が浮かび上がった。唇が薄く目尻に冷ややかさを光らせているその顔は、二トンダンプの運転席でときどき見る顔だった。母の裸の背中が見えた。俯せのまま、声も

たてない。

男は舌打ちをし、煙草に火を点けた。マッチを枕元に放り、煙草を一口、二口吸い込んだ。それからどのくらいの時間が経ったか僕は知らない。決して眠りに落ちていた訳ではない。母たちに背を向け、眠ったふりを続けていた。

ハッと我に返ったとき、僕の背中を火が走った。その火が、瞬く間に顔を掠めて立ち上り、二メートルの高さに舞い上がった。僕は振り向き、母を見た。

母は燃えさしの新聞紙を掴んで立ち、寝巻の肩口を広げたまま後さす。男の脱ぎ捨てたシャツが、僕の背後で一本の火柱となって立ち上ったのだ。男はいったん次の間に駆け出て、部屋の隅から走り戻ると、よろけながら立つ母に激しく殴り掛かった。母は襖とともにもんどりうって倒れ、ヒツと短い声を発した。

僕はどうやって火を潜り抜けたのか、知らない。パジャマのボタンを千切り、渾身の力を込め、腕を、肩を引き抜こうとした。目の前に母の手を離れた新聞紙があり、煤の臭いが立ち籠めていた。煤の臭いに混じって、微かな化粧水の匂いが鼻を突いた。

母は震えていた。破れた襖の上に半身を起こし、身を振りながら、張り裂けるのではないかというほど眼を開き、男と僕を見据えた。

エスカレーターを昇り詰めるあたりになると、吹き下ろす風が勢いを増してくる。湿りを帯びた黄昏の中に出て行く前の、それが最後のステップになる。実際、正面から向かってくる風の強さといつたらない。男の蓬髪が顔中を痛いほどにまさぐるし、自分の前髪が吹き散らされる。

僕は、頬のひきつれから生え際のあたりを手で覆う。いつもそうである。他人の視線が僕の頬のあたりに止まる瞬間の表情を、見逃さない。教室での仲間たちの、アルバイト先の私たちの、駅の人込みでの擦れ違いざまの、彼らのその一瞬の表情を。

左手でくねり下ってくる風を遮り、右手にバッグを下げ、最上階のフロアが見えるあたりまで来た。しばらくの間、体温の温もりが感じられるほどの間隔で接してきた男とも、これで離れ離れになる。

百数十万市民が住む都市で、一度出会うということなど考えられないほどの偶然であるに違いない。それがエスカレーターからエスカレーターへ寄り添い移るとなると、よほどの意味付けをしなければ収まりがつかないことであるのかも知れない。

そんな思惑などに関係なく、エスカレーターは変わらないうりズムで昇り、風のままに蓬髪をそそり立たせて男は、ゆつくりと襟元を繕い腕時計を覗いている。ストンという感じで、エスカレーターはフロアに下りた。

猛々しい力が背中を押してくる。次々にフロアに下りたつた人々が、それまでとは別人かと思える様で、列を乱し先を争い改札口に走る。男は改札口へは向かわず、あたりをぐるりと見回し、列から逸れると手洗の矢印の方へ小走りに去って行った。エスカレーターの中で、しきりに体を揺する仕草。そういうことだったのかと思ひ当たると、男の存在が妙に愛しいものに思えてきた。

交差点のあたりは、ひどい渋滞だった。都心から郊外へ向かう車の列が、数キロは続いているのだろうか。バスレーンでは、満員の客を乗せた路線バスが信号が変わっても進むことが出来ず、交差点の手前で止まったままだった。

何とかして割り込もうと、タクシーが隙を見て侵入しようとするのだが、前方が動かないため、さじを投げた様子でクラクションを時折鳴らしている。どこかでサイレンが鳴っている。救急車の音も割って入る。

僕は、途中で急ぎ足に歩き掛けて止めた。何のことはない、今日は紀伊国屋は店休日である。そのことに、今が今まで気分がなかった。紀伊国屋ビルの入口で引き返し、路地奥のアルファに入った。

アルファは僕たちの溜り場である。法学部志望の横田、工学部志望の花井、医学部志望の渡辺という連中が、この時間には数人屯しているのだが、コーヒー二杯を注文し、煙草を三本吸い、ミュージックジャーナルを一冊めくる間

母と、二人の子供を捨てた養父とが一緒になった。

当時僕は、寢床に入ると決まって魘された。寝入ったと思うと、養父と母との微かな気配に目覚め、次の瞬間には、養父が母を打ち、髪を振り乱した母が、燃え上がる新聞紙を振りかざし、とそこまできると、自分でも驚くほどの大声を上げ布団を転げ出た。

乱れた呼吸と躍っていた脈拍がいくらか落ち着いてくると、そこには養父の姿も母の姿もなく、自分の部屋に一人であることを知るのだった。僕はパジャマに染み通った汗を拭いてもせず、二階の窓をそっと開け、灯りの消された養父と母との部屋をいつまでも穴のあくほど見詰めた。

郊外電車の駅まで歩いた。紀伊国屋ビルから交差点を斜めに歩き、コンコースに着いた。コンコースは、勤めを終わってオフィスから出て来たサラリーマンや、若いOLたちの群れでこったがえしていた。足元に開いた地下鉄の出口からも、新しい群れが次々と跳ね上がって来る。

人込みに遮られしばらく立ち止まっていたが、何とか流れに割って入ると、電車の乗り場に向かう列の最後尾にいた。ふとした気配に、後ろを見やっした。地下鉄から上がって来るところの、少し壁の奥まった一角。

視線が合ったのは、あの男だった。エスカレーターの、蓬髪の男。男はブレザーを脱ぎ、つなぎのジーンズ姿で小

誰も現われなかった。横田も花井も渡辺も、予備校秀英学館の仲間であり、二浪というところまで一緒である。

僕は、父を知らない。僕が生まれるより先に、美専中退だったという父は、仕事先の工事現場で死んだと聞かされている。地上十メートルの高さから、誤ってアスファルトの地面に叩き付けられたのだという。

母に幾度尋ねても、それ以上話そうとしない。話せない事情があるのだというより、話せる内容などないのかも知れない。いつの頃からか、そう思ひ込むことにした。

今の母の夫は、僕に数度にわたる植皮手術を受けさせ、大学受験も今度で三度目のチャレンジをさせてくれている。養父は僕が小学校に上がった年にやって来たから、十五年近い関係になるが、一度として面と向かい声を荒げたことも、手を上げたこともない。

「お母さんは、あまりにも悲しいことに出会い過ぎた。しかし、これからはどんなことをしても私が守る」

養父は、勿論二トンダンプの運転手ではなく、県立高校の教頭をしている。母と養父とは、臨時職員として母が町の図書館に勤めていたとき知り合ったらしい。

当時、養父には二人の子供がいたという。母が養父を奪ったのだとも、養父が母を執拗に追い掛けたのだとも言われている。どちらであるかはともかく、小学生の子持ちの

さな椅子に腰を下ろしていた。十四、五枚の絵を壁に立て掛け、煙草の煙を手持ちぶさた気に口元に漂わせている。視線が合うと、ニヤリと笑った。僕がコンコースに入ってきたのも、いや、エスカレーターで一緒に昇って来たときから僕を知っていた、とでも言いたい気に片目を軽くつぶって見せた。

「幸福の詩」

男は頷いた。男の蓬髪よりメートルばかり上に、達筆の楷書体でそう書かれている。

「大切なことだよ。特に、君にはね」

男は煙草の灰が零れ落ちそうなほどに長くなっているのも構わず、体を振って笑った。笑った男の目が、博多にわかかの面のそれになる。僕は目を逸らそうとしたが、どういうわけか、その絵の前に釘付けになった。

一人の若い女性が、折からの風に髪を靡かせ、湖に向かつて佇んでいる。女性の手は、いく分傾げ気味の頬に当てられ、もう一方の手は、頬に当てられた方の手の肘のあたりに、軽く添えられている。三号に満たない小さな画面であるためか、はるかに広がる湖の方に視線を導こうというためか、あるいは後ろ向きに近い女性の肢体だけを描こうとしたためか、女性の顔には目も鼻も口もない。そのくせ若いその女性は、内に抱えきれないほどの憂いを宿しているのだとわかるのだった。

僕は、その場を離れられなくなった。地下鉄口から出て来た若い男が、僕の踵を踏み付けて通ったときでさえ目を離さなかった。

七万円とある。ポケットを探った。千円札が、指に数枚触れた。「金かい」と男は予想していたかのごとくにほくそ笑み、「二、三日待ってやるよ」と言いながら壁から絵をはがし、ビニールの手提げ袋に入れ、差し出した。

ためらうと、「いつも会ってるんだよ、君には。数十回いや、もつとかな。大丈夫さ、俺はいつだってここにいる」と笑った。

僕の手には、袋の重さが被さってきた。男の蓬髪が地下鉄口からの生温い空気におおられ、方向の定めもなく揺れる。その笑った細い目が、奥の一点でカチッと光ったと見えたのは、思い過ぎしただただだろうか。

四畳半のアパートには、机、冷蔵庫、テレビ、本箱、テーブル替わりのコタツしかないが、敷きつ放しの布団や、一年半にわたるゴミと埃とで足の踏み場もない。

僕はコタツの上のものを急いで払い除け、幸福の詩を袋から出した。幸福の詩は、ときどき瞬きをする癖のある天井の蛍光灯の下で、コンコースで見たときと少しも変わらない輝きで迫って来た。憧れと諦め。それらの入り混じった、しかし、どこか温みのある倦怠。

二人の子供を捨ててまで母を得た養父。僕にはそんな養父の振れた矜持が、何年もの仕送りを続けているのだ、としか思えないのだった。

電話のプッシュボタンを、猛スピードで押す。十回目のコールで、若い女性が出た。

「こちらはA T Tテレホンサービスです。いつもお世話になっております。ご利用の点で、何かご不自由などおかけしてありませんでしょうか」

「いえ、特に」  
「ここまでは、うまくいく。しかし、これからが予測のつかない展開を見せていく。」

「今日は、少しだけお時間をいただきたいと思いますが、よろしいでしょうか。K Tホンというシステムをご存知でしょうか」

ここから五つほどのタイプに分かれ、ストーリーは展開する。始めA T Tという言葉に従順であった彼らは、単なるもの売りだったと気付くと、急に居丈高になったり、忙しいとか、出掛ける前で取り込んでいるという口実を探し始め、口実が思い当たらない場合はだんまりを決め込んでしまう。あるいは、最後まで話をさせるだけさせておき、いきなりせせら笑い、「A T Tも暇ですなえ」と捨て台詞を残して受話器を投げたりする。

僕は絵の前に座り、改めて幸福の詩に眺め入った。それは素材がどうか、構図や色がどうかなどはまるで関係なく、とにかく、何かを切実に訴えている。

女性の少しくねった肢体。そこには肉感などなく、女性を包む光と影が淡い湖の佇まいに溶け込んで、あたりの微かな風の音さえ聞こえて来そうである。

幸福の詩。悪い題ではない。しかし、この絵がああの手になるものとはとても思えない。額に脂を光らせた雲脂まじりの蓬髪の男。とりあえず五千円を払おうとしたが、男は「まとまった金が出来てからでいい」と受け取らなかった。僕のくたびれたジーンズとズックを見れば、七万円の金が工面出来るなどとは、とうてい思いも付かない筈なのであるが。

実際二浪目の今年は、親元からの仕送りは半分が減り、アルバイトで何とか食いつないでいる。初め浪人は一年だけのつもりであったから、二度目の入試に失敗したこの春は、新聞公告を探しても職に就こうと考えた。しかし養父は、二浪目の今年も仕送りを続けると言ってくれた。それを最小限の生活費だけでいいからと申し出たのは、僕の方である。

いつまでも、養父の手の内にあるのを疎ましく思ったからだけではない。数度にわたる植皮手術の費用も惜し気なく出し、私立高校へ通わせ、それに予備校の仕送りである。

「お若い方だと、多分お友だちもたくさんおありかと思えます。少しおしゃべりが長くなっているとします。そのとき、もし緊急にお客様に連絡を取りたい方が番号を何度押しても、お客様はそれを察知することが出来ません。お客様のおしゃべりが、かなりの時間になったとしますと、相手の方はお客様にどうしても伝えたい気持ちがありますが、ぐらかされてしまわないとも限りません」

話の糸口だけでも見付けることが出来るというのは、三十件に一件ぐらいのものである。

「そんなとき、確実にお客様にコールを送ることが出来るのです。お客様がそのコールを受けるかどうかのご判断は自由ですが、受けるときには、最初の話を保留したまま新しい用件をキヤッチ出来、お客様ご自身が重要な方を選択なさればよいのです」

「便利ではありませんね」  
「いくらか手応えがある。半年あまりの経験で言えば、かなりよい感触の部類である。」

「例えば、お客様がお話中、ご主人のお仕事の関係の連絡がタイミングよく入って来たとなります。それが、大切な用件であるときのことをお考えください」

「私、まだ学生です」  
「例えば、というお話です。学生さんなら、余計に便利だと思われませんか」

僕の声は人前にいるときとは違って、自分でも感心するくらい落ち着いているし、言葉も伸びやかになる。

「ゼミの連絡、試験の対策、クラブの打ち合せ、どうですか。そんな経験、お持ちじゃありませんか。私もよく利用します。仕事柄、上司やお客様からの緊急の用件がよく入るのですが、手短かに連絡を受け、ほぼ要請に応じて来たのではないかと思っています」

少しアドリブが入る。電話の向こうで、頭を捻っているらしい気配がする。こういう段階まで来ると、僕にもかなり自信が出てくる。

この後、マニュアルでは、局側の回線をKTホン用に切り替えれば済む簡単なものであること。したがって、この機能を利用するのに必要な料金は、一月三百円の基本使用料のほかには何もいらぬものであることを説明することになっている。

「あの、一つだけ、お尋ねします」彼女は、おずおずと切り出した。

「全然逆の場合ですけど。ちょうど大切な用件をお話ししているとき、コールが鳴ったらどうなるんですか。ええ、とても大事なお話のときです。誰にも割り込んで欲しくないと、そんなときです。だって、私」

「何か」

「今、何日も何日も考え抜いた挙句、やっとその電話を掛

ける決心がついて、腰を下ろしたところだったのです」

ATTでアルバイトを始めて、そろそろ半年を越える。

アルバイトの情報は、秀英学館事務室の掲示板に受け付け順に出される。内容は殆どがデパートやスーパーの配達であり、月五万から六万円と条件はまずまずよいのであるが、それは他の者のためにあるのだと思っている。

ATTの分は三月以上も前の日付で、色の褪せたB5の紙にインクの文字もかすれ、押しピンからめくれ落ちそうな格好で張られており、ATTでのKTホン獲得事務、と書かれていた。時給五百五十円。ただし、一件確保につき五百円割増支給となっている。

コンビニのレジ係や喫茶店などに比べても、さらに時給が百円から二百円ほど安い。この分なら、まず希望者はいないだろうと予想した。僕は事務室窓口で、KTホンの事務はまだ募集しているのかどうかと聞いた。

「張り出しているものは、募集しているに決まってるだろう」

事務員は面倒臭そうに言い、寝形のついた髪を掻き上げた。昼休みの眠りを破られた不機嫌さが、目の端にありありと見えた。

「申し込んでみたいのですが」

事務員は小さな紙をカウンターに放り、顎をしゃくった。

アルバイト紹介書とある。年令、氏名、手帳番号を書く、学館長が印を押して紹介することになっている。

「それよりお前、な」

左前方に絡み付いてくる視線を感じ、僕は顔を上げた。

手帳を出して、番号を記入していたのだった。

「そんな古い手帳、人前に晒せるもんじゃないだろうが」

「でも、番号を確かめない」と

「そんなこと、言つとるんじゃない。秀英学館でな、二浪も三浪もするやつは困るのよ。こんなで、アルバイトも何もあるまいに。いったいやる気があるのか、ほんとに」

事務員は僕の左頬に止めていた視線をフンと逸らし、あくびを一つすると、俄然攻勢に出た。そして、青い表紙のファイルを掴むと、ばらばらめくり「なに、九大文系だとお。この成績でか。お前、現実わかっつとるのか」と言い掛け、「まあ、どうしようもないやつだって一人は一人だからな」と意味不明の言葉を呟き、朱肉の付いたか付かないかわからない印を乱暴に押し、手数料三百円を掴んで手提金庫に放り込んだ。

それきり、もう用はないとばかりに背を向け、今度はテレビの画面を眺め始めた。

「まだ、あのアルバイトの求人、出してあったのですか。今、固定電話より携帯の方に力を注いでいますので」

ATTの四十年配の係員は、以前二人だけ紹介書を持って来たが、二人とも二日目には辞めてしまったと言う。係員は僕の左顔面のひきつれに目を止め、あわてて目を逸らした。そして、当惑な表情のまま僕を招くと、オフィスを抜け、階段を上って突き当たりの部屋に招き入れた。

部屋はそれほど大きくなく、小さな事務室といった作りであったが、コンピューター様の機器が壁際に五台ばかり並べられ、剥出しの配線がその機器から床へ、あるいは壁へと、数知れないほど張られていた。

係員は、機器と配線の間で置かれたスチール机に掛けるよう勧めた。

「倉庫だったのですが、一階のオフィスの方が手狭になり、こちらもゆくゆく改装するということで机と椅子だけを入れたのです」

係員は眼鏡を一度外して指で拭い、改めて掛け直すと、「このとおり、窓がないものですから」と言い訳がましそうに言い、「それでも一人だけの部屋というのは、われわれには夢物語ですからね」と追従じみたことを言う。

狭くて窓のない部屋の割には、機器の保守のためだろうか、適度に空調が整えられており、慣れれば居心地はそんなに悪くないのではなからうかと思われた。それにやはり、一人だけの部屋というのが気に入った。

時間も曜日も特に指定されていなかった。事務所が開いているのが五時までで、遅出組の職員の勤務時間が八時までだから、僕の仕事も八時がリミットということになる。

僕は秀英学館の授業が早く引ける火曜日と木曜日、それに土曜日をA.T.T.の時間に当てることにした。火曜日と木曜日が五時から八時まで、土曜日が二時から八時まで、という具合である。これで、何とか月額三万円弱になる。アルバイトにしてはたよりないが、ないよりはましといったところか。

とにかく、週に十二時間、配線の剥出しになった機器の低く唸る部屋で、一人過ごすことになった。仕事の要領は与えられたリストに従い、マニュアル通りにK.T.ホンを売り込んでいく。売れようが売れるまいが、一時間に二十件以上のコールをしなければならぬ。一日目にして、これまでの二人が翌日には姿を現わさなくなったということの意味が、たちまち実感となった。規定の十回以上ベルを鳴らし、それで一件のコールが成立する。二件目も三件目も同じである。五件目に、初めて相手が出た。

「A.T.T.です。いつもお世話になっております。お電話の調子は」

自分の声が喉の奥からまり、うまく出てこない。渴ききった砂漠の中で、砂山を掻き分けながら、やみくもに進んでいる。そんな情けない自分が、もう一人の情けない自

分に向かつて自嘲気味に囁き掛ける。

「セールス、一切お断りです」

一日目は、六十七のリストに掛け、相手が出たのが七。内、マニュアルの通りに最後まで話せたのは、ほんの一件。その返事が、「わたしには、何もわからんです。何しろ目が不自由な上に、殆ど寝てばかりですし。いやあ、あいにく嫁が里に帰っていますで、夜にでも、も一度掛けてくださいませんか」というものだった。

子供のためのロンド、が掛かっている。R・クレイダーマンのソロのやつである。

昼前の教室を抜け、アルファに来た。

本当は、コンコースを覗くためにやって来たのである。しかし、男はいなかった。あれから、僕は地下鉄口を上ったところの、例の奥まった一角を必ず覗いて通った。

蓬髪を地下鉄口からの生温い風になびかせている、小太りの男。

「いつでもここにいる。君のこと、何でも知ってるさ。君には、幸福の詩が似合うよ」

男はポトリと灰を落とし、目脂のこびりついた頬を手の平で撫でた。

あれから二週間が過ぎた。毎日、秀英学館の帰りに必ずコンコースの一角に立ち寄った。あの日と同じ地下鉄に乗

り、エスカレーターを昇って、紀伊国屋の下まで歩き、アルファで二杯のコーヒーを飲み、コンコースにやって来た。

ポケットには、一万円札が七枚ある。渡辺から三万円、横田と花井から一万円ずつ借り、A.T.T.からもらったばかりの二万円を加え、やっと七万円をつくった。

この二週間、A.T.T.のアルバイトは休んでいる。なぜこんなに男に会いたいのか、自分でも説明がつかない。

「金ならいつでもいいさ」と、男は言ったのだ。その言葉を真に受けるつもりはない。かといって、今日明日中に返さなければならぬものでもなかるうとも思っている。「君には、本当に何度も会っている」

男は、博多にわか面の面よりもっと細い目で笑ったのだ。た。あんまり目を細めると、顔のどこかが崩れて、泣き顔になるのではないかと思つた。

「君の行こうとする先、見えるんだよ。ここにいろね」  
男はクツクツと笑い、フィルターの根元まで燃え進んだ煙草を、親指と人差し指の先でつまんで深々と吸った。

曲が、ほほえみのバネッサ、に変わったとき横田がドアを開けた。

黒縁の眼鏡を掛けているが、度は入っていない。だからアルファではたいい眼鏡をはずしている。素顔の横田は、背が高くずい分野太い印象を与える。実際、法の条文を追

っていくより、人を操っていく方に才があるのではないかと思わせる迫力がある。

横田と呼んだのに、横田は眼鏡をはずしめせず背を丸め、僕のいるテーブルとは反対側の席に腰を下ろした。狭い店内のことだから、横田に僕の声が届かない筈はない。後ろ向きに座り、ドアの外に目を泳がせながら、おしぼりで顔を拭いている。

背中を叩くと、びっくりした顔で振り向いた。しかし僕だとわかると顔を赤らめ、急にがっかりした表情になった。「竹内か、何だ」横田はおしぼりをテーブルに戻そうとして、コップの水を半分近く零してしまった。そして、「お前、今日はバイトじゃなかったのか」と切り口上になる。「何言つてやがる、五、六時間目は休講だ。掲示板見てねえのか」

横田は、腕時計に目をやる。二時を十分回っている。「約束は二時かい」僕の言葉が、横田の落ち着かない目の中で左右に揺れた。

アルファの向かいの交差点に、小柄な秋本理沙の姿が現われたのを見付けると、横田の頭を一つ小突いて僕は店を出た。

いったんコンコースへの道を歩き掛けたが、思い直し、川沿いの方に歩いた。橋を渡り商店街を抜けると、屋上に

緑色のアンテナのあるA T Tビルの正面に出る。

二週間の間無届けで休んだので、入ることに少しためらいがあったが、玄関を開けると、窓口嬢がいつもの笑顔で迎えてくれた。そのままオフィスを横切り、二階に駆け上がった。

一人だけの部屋は、二週間前に僕が退室したときと変わらずそこにあった。めぐりかけのリストも、少し斜めに置いた電話の位置も、横を向いたままの椅子もそのままだった。シャリシャリと鳴る空調の音も、壁の白さも変わっていない。ふうつと長い息を吐き、事務椅子に浅く腰を下ろした。これから仕事を始めるというときの、いつものサインである。

リストを引き寄せる。十月××日と鉛筆で印した行から下が、今から取り掛かる相手先になる。福岡市東区の「か」行が、十四、五ページにわたり続いていく。

僕はこのぶ厚いリストを手にするので、一つ胸躍ることを知った。最初の日、リストの多くに付けられた\*印を見てみると、目敏く見付けた係員が、その\*印の分には決してコールしてはならないと言った。聞くと係員は応えを渋っていたが、これは電話番号を公表しないという条件付きの契約の分なのだと言った。

誰が何のために、\*印付きの電話を契約するのか。考えられるのは、一人暮らしの女性名義のものなどであろうと

わからないというほどのずば抜けた成績である。

奈津子はいつも前列から五番目の左端にいて、色白の細身の姿を際立たせている。授業中は、肩までかかる髪をときどき指で梳きほぐす仕種をするくらいで、きちんと教壇に目を向けている。とり澄ます風でもなく、授業に食らいついていくといった風でもない。

「余裕だよな、あの余裕。いったい頭が振れるほど悩んだりすること、あるのかなあ」

話題といたらまず奈津子のことになる花井が、唸りとも溜め息ともつかぬ声を出す。

「たいていの子、おしやれで売っている。だけど奈津子の場合、存在感がまるで違うよな。仮に彼女の成績が普通かそれ以下だったとしてもだ、どきつとくる存在に違いないぜ。これって、彼女独特のオーラからくるものだよ」

奈津子は、福岡市東区の女性だけのマンションに住んでいると聞いている。リストの住所は、福岡市東区、翠レイスマンションとなっている。前後の相川という名前から見ても、東区のレイスマンションというのはほかに見当たらない筈だったから、住所も、電話番号も、百パーセント間違いない筈だった。

今日も話は先に進まない。二時半から仕事に掛かって、やがて五時だというのに、中段階まで進んだのは、三件で

は思われるが、男性名義のものも多く見うけられ、その意図するところはよくわからなかった。

しかし、僕にとつて大発見だったのは、第一ページ目に相川奈津子の名前を見付けたことだった。もしかして、相川奈津子の電話番号を調べようという気になっていたかどうかかわからない。なにしろ\*印の分は決して外部に公開してはならないし、A T Tからの問い合わせや売り込みなどにも殆ど使用しないという、密封された空間に棲む異次元生物とでも呼ぶべきものであった。

僕は相川奈津子の番号を諳じてしまった。覚えやすい番号であったし、リストを開ければ、いつでも右下隅にゴチツク体よろしく、一番先に目に飛び込んでくるのだった。

福岡市東区の「か」行を始める前に、その部分に葉をさみ、いったんリストを閉じた。

相川奈津子。秀英学館で、恐らくこの名前を知らない者はいないだろう。月々の成績が掲示される度に、必ずトップに名前が出る。奈津子は医師であった父を幼い頃に失い、母も不慮の事故で亡くし、叔父の経営する外科医院に引き取られ、父が勤務医をしていた福岡市で小児科医を目指そうとしているらしい。

そのことは、同じ医学部を目指している渡辺から聞いているが、奈津子がどうして現役で落ちたのか、その理由が

しかない。

このアルバイトを始めて半年になるが、これまで契約にこぎ付けたのは二件だけだ。一件は、渡辺の知り合いの医院の息子で、勧誘があったら話に乗るからと、手筈が整えられていたものだった。

もう一件は、相手の話を逆に聞かされる羽目になり、しかたなく相槌をうっていたら、いつの間にか契約が成っていたというものだった。一件目はともかく、二件目などマニュアルに触れもしないのに、向こうから勝手に契約が転がり込んで来た。勿論、その後にも先にもこんな例はない。

窓の一つさえないのに、眩いぐらいに明るい部屋。その部屋の殆どを席卷し、赤や青や、黄や緑や、白や黒の剥出しの配線が、床を這い、壁を伝い、天井に上って行く。こちらからコールするばかりで、一度もベルが鳴らされたことのない、ボタンのいくつもついた、まるで無線装置様の電話。昼も夜も、変わることなくシャリシャリと、砂丘の砂が果てもなく吹き流されて行くのではないかという音をたて、空調が鳴っている厚い壁がめぐらされた空間。

しかし、僕にとつてこの部屋は、かなり快適な場所である。最初の内こそ倉庫の一隅に閉じ込められたという錯覚に陥り、少なからぬ気鬱を覚えたのだったが、係員が言ったとおり、誰にも邪魔されることなく、一人で数時間を占有することが出来ることはこの上ないことだった。

この部屋にいと、僕は僕自身であることを、ほんの束の間ではあるが忘れることが出来る。反対に、皮肉ではあるが、僕が、僕自身の内に落としているものの影のことを思い知らされたのも、この部屋の主となつてからのことであるのだが。

髪の毛の焼ける臭い。

僕の思いは、いつもそこから始まる。そこに立ち止まり、釘付けになることから思いは始まる。髪の中の焼ける臭い、弾け散る脂の臭い。一本の火柱。男の呻き。甘酸っぱい体臭。獣の唸り。夥しい汗。骨のきしむ音。肉のひしゃげる音。悲鳴。饅えた血の臭い。夜明け前。掻き分けても、掻き分けても、潜り抜けることの出来ない薄闇。闇の底。僕はこれまで、僕自身であることからどんなに懸命に逃れようとして来たことか。

僕は教室で、駅の階段で、道の擦れ違いざまに、僕に向けられる視線の鋭さを、知っている。それは、ほんの瞬時のことではないが、彼らの瞳の内に、驚愕とも、侮蔑ともつかない色が横切り、弾け散る。

僕は部屋に居る間、絶え間なくコールを続けているし、疲れると、頬杖をついて壁を眺めたり、剥出しの配線を数えたりしていることもある。しかし、すぐにリストの次のボタンを押すことになる。じつと壁を眺めやっていると、

屋台に入った。ニラレバー炒めを頼み、焼酎を三杯ずつ飲んだ。

「まだ出ねえのかあ。止めちまえ、おふくろになんざ、ぞつとするぜ。俺はな、自分から理沙になんか、絶対掛けたこねえからな」

僕は、十四、五回目のボタンを押す。この時間にはない筈はない。電話は、母たちの寝室の隣の応接間にある。コールの音が、聞こえないことなど考えられない。

「お楽しみのみ真つ最中だろうぜ。面白くもねえ」

小便をし終えた横田が、公衆ボックスのガラスを、外から激しく叩く。面白くもない、と言いたいのはこつちの方だ、と呟き掛けたときいきなり相手が出た。寝室からあわてて飛んで来たらしい養父の「もしもし」だ。僕はそのままフックを押さえた。養父の不機嫌そうな声が、受話器の中で短く呻いて消えた。

「電話、替われ。今すぐ、花井と渡辺を呼ぶ。元はと言え、ば、あいつらの金で飲んでるんだからな。呼ばなきゃ袋叩きにあうかも知れねえ。もつとも、俺は絶対、理沙とは口をきかねえからな」

横田は、秋本理沙から、突然会いたくないと告げられたのだという。

「理沙のやつ、横田さんが嫌いになつたなんて違う。ただ、お互いに、今がとても大切なときだから、しばらく会わず

いつか壁が鏡となつて光り始め、自分が壁の中に嵌め込まれていることに気付く。そうして、左前額部から左頬にかけて、大きなひきつれの残る自分の顔が、その鏡面一杯に広がってくる。

そんなことは、度々起るものではないが、初めて経験したのは、この部屋に来て数日目のことだった。受話器を下ろして目を閉じ、しばらくして目を開いたとき、自分の顔が真正面に大写しになっているのを見た。

自分で自分の顔を見ることがほど、僕にとつて嫌なものはない。鏡の中の顔には、赤や青や白や黄の剥出しの配線が、渦を巻き、巻き上がり、激しく点滅していた。

吐く息が、自分でもどぶ臭いと思つた。受話器に掛かる息が、向こう側へ落ちて行かず戻ってくる。にんにくとニラとレバーと焼酎の入り交じつた、すごいやつだ。

「いい加減にしやがれ。ミルクの味でも恋しくなつたのかあ」

小便を飛ばしながら、横田が後ろ向きに怒鳴つた。小便をする間、体が横に揺れ、仰向けに電話ボックスに倒れ掛かるものだから、靴を濡らし、ズボンを湿らせる。

なにしろ、二人でビールの特大ジョッキ六杯ずつと、焼酎三杯ずつを飲んだのだ。ビアホールに入ったのが八時頃で、看板までいた。そして、二人で肩を組んで歩きながら、

にいた方がいいと思うわ、だつてんだ。馬鹿にしてやがるだろ」

ボックスから出掛けた僕に、横田は体当たりを食わせ、入れ替わりにボックスに入つて行つた。そして、おぼつかない指で、ボタンを押していく。その間、頭や肩をガラスに嫌というほど打ち付け、片手の受話器はボックスの中を泳いでいた。

僕が母に電話を入れたのは、どこでどう洩れてしまったのかわからないが、前日、七万円の現金封筒がアパートに届いたからだつた。実際七万円の紙幣と一緒に、母からの手紙が添えられており、「不自由でしようけど」という字面が見えた。勿論僕は手紙を読む気などないから、引き千切れるだけ細かく千切り、ゴミ箱に放つた。いらぬ世話だ。第一、この金は妻子を捨てた、あの男が稼いだものだ。おためごかしだ。そう吐き捨てたい自分が、どうして二浪もしているのだ。選りに選つてあいつらの世話のもとにとまた腹立たしくなってくる。

「絶対な、俺は理沙の尻など追ひ掛けてなんかいねえ。俺はな、本当に渡辺のやつに掛けたんだ。それが、何で理沙が出る、え、どうしてだ。考えてもみる。俺がな、間違つても理沙に掛けるわけねえだろ。第一俺はな、向こうから会わないという相手になんぞ、ちつとも未練はない。わか

るだろう」

横田は、何度もしゃつくりを吸い込む。

「そうだ。お前に限って間違いつこない」

僕には、横田の胸の内がいくらかわかる気がする。ベンチの中央に、完全にのめり込んだ横田の横顔に、理沙の言葉が幾重にも貼り付いているのだろう。身を振る度に、街灯の影が青く這い上ぼったり、下ったりする。

冷蔵庫のりんごジュースを口に含んでも、戻さなくなつたのは、二日目の昼近くになつてからだだった。二日間というものの、汚物と腐臭にまみれ、焼け棒杵同然に転がっていた。

全く、この二日間ほど、自分が木偶人形に等しいことを思い知らされたことはなかった。転がっている顔の前にテレビ台があり、ガラス戸があった。自分の部屋に、鏡の類はないのだが、身動きならない状態で鏡と向かい合うなど、予想もしなかった。テレビ台のガラスが、ほどよい光線を受けて鏡となり、僕の顔を大写しに写し出す。僕の頭は、吐瀉物で髪の毛が立ち上がったまま固まり、その加減で、ひきつれの痕が頭頂部から額に流れ、いきなり左頬に鋭く落ちていく。

僕はこれまであまり気に止めたことのなかった、頭頂部からの眺めに、言葉を失くしてしまった。ガラス戸に、震

える指を伸ばし掛けたが止めた。

目尻が、濡れていた。体中の水分という水分は吐き尽くしている筈であるのに、不思議なほど目尻が濡れた。可笑しかった。身内から込み上げてくる笑いが、目尻の水滴をひくつかせ、押し流した。

「見事なもんだよ」口をついて出た言葉に、訳のわからない気持のよさがあった。本当に、低い笑いが腹の底から込み上げてきた。殆ど僕は、そこらじゅう笑い転げたい気分だった。膝から下は、だらしなく痺れていた。何も入っていない胃の腑は、廊下の向こうで誰かが流す水の音にも、敏感に反応した。

「君には、ここが覗けるかい」声の主の方に、首を振り曲げた。誰もいなかった。

「ふむ、俺の姿が見えないのか」

せいっぱい首を振り上げ、声の方を振り仰いだ。

「ほらここにいる。俺だよ」

間違いなく、あの男である。蓬髪を風に揺らし、饅えた臭いを漂わせていたコンコースの男。

「君らしい格好だ、特に今は。そこから何かが見えないかい」男は高めのトーンで、いかにも楽しくてたまらないらしく、クツクツと笑う。

僕は、男の声の方にじっと目を凝らした。が、見えるも

のではない。そのうち、じっと見詰めている視線の向こうに、ぼんやりと見えてきたものがある。

女性のわずかにくねった肢体。女性を包む透明な風。それらが、はるか後方に広がる白い湖の佇まいに溶け込み、鈍い光を放っている。

「幸福の詩」

僕は、小さく呟いた。上体が動く範囲で、少し伸び上がって見ようとした。伸び上がろうとして、腰を泳がせた。目先に畳の縁があった。腰を泳がせた途端、畳の縁に頭が落下した。目蓋から火花が飛んだ。

「俺も君と同じものを眺めているのさ」男の笑い声が、追いつけてきた。

三時限目が終わっても、横田は現われない。めつたなことでは授業を欠かさない秋本理沙も、今日は顔を見せない。

五列目の左端に、奈津子がいる。休憩時間になり、周りざざわめき始めても、席を立たない。細い上半身がすつと伸び、肩に掛かる豊かな髪が、窓からの風にやわらかに揺れる。薄緑色のシャツが、奈津子の色白の横顔を鮮やかに映している。

今朝張り出された月間成績で、奈津子は、二位以下にさらに大きな差を付けた。これまでもかなりの差を付けてトップにいたのであるが、決して悪くはない二位の渡辺が、

遠く霞んで見える。このまま行けば、志望の国立大学の医学部など、どう転んでも間違いのないところであろう。

ところが僕の成績の方は、去年の今頃よりさらに落ち込んでいる。このレベルだと、事務の方で言われるまでもなく、九大文系など殆ど考えられない位置になる。そんな自分の不出来を忘れさせるほど、奈津子の全科目に付された信じられないほど高い数字は、芸術的な緊張感さえ漂わせていた。

僕は一度、偶然奈津子と隣り合せの席になり、簡単な言葉を交わしたことがある。僕にとっては一年と一日目の、オリエンテーションのときだった。

奈津子は、入学一日目から一際目に付く存在だった。ベージュのスーツを着て入学手続きをしている姿は、入社式に現われたOLかと見間違えうほどだった。

その彼女が、先に席に付いていた僕の隣に入ってきた。「構いませんか」

「ええ」

何の変哲もない会話が、僕と奈津子の間に交わされた。

その日以来、僕は、奈津子の横顔が出来るだけよく見える斜め後ろの席に座ることにした。渡辺や花井も同様に、僕よりさらに二、三列後ろに席を占め、横田は最後列、という具合だった。

最初、奈津子が医学部を目指しているということを知ら



ない頃、彼女が僕の顔をじっと見詰めることがあったのを、ひよっとしたらオリエンテーションのときのことを覚えていてくれたのではないかと、胸を高ぶらせたりしたこともあった。

その後奈津子とは一度も口をきいていないが、今になって思えば、外科医の叔父の元に来る幾人もの患者を見るのと同様に、僕の前額部から左頬に掛けてのひきつれの痕を、医師志望の目で観察していたのだろうかと考える。

そう考える方が自然であるし、僕にとっても納得がいく、ともかく奈津子は、入学した最初のテストで、いきなり五教科すべてがトップという成績を上げたため、誰もが遠巻きに彼女を眺めるということになった。

それにしても、奈津子には、人をハッと振り返らせるものがある反面、他を寄せ付けないところがある。決して高くとり澄ましていたり、険があたりするということではない。それがどこに由来するのか、僕にはうまく説明出来ないが、多分教科に隙のないこと、神経の行き届いた服装を崩さないこと、幼い頃に両親を亡くしたということ、などに起因するのではないかと僕なりに思ってみる。

実際ドンファンを自認する花井でさえ、奈津子に声を掛けることさえ出来ない。それは、大方の秀英学館生に言えることで、つまり、僕たちレベルの者にとつて、奈津子はあまりにもかけ離れ過ぎた存在であるということだった。

それは、なにかの偶然の手違いによるものであったのに違いない、と勘繰りたくなるほどだ。

二十三人目の、それも九回目のコールで間延びした老婆の声が返ってこなかったら、全くそう信じてしまうところだった。しかし、二十三人目もいけなかった。

何を聞いても、どんなに声を大きくしても、老婆は聞き取れない。老婆の声の方は耳元で大きくなるのであるが、全く返事になっていない。そのうち、「ちゃんと用件を言うてみよ」と先方が怒り出した。しまいには老婆の方があるきらめたとみえ、先に受話器を置いた。一気に、全身の力が萎えた。

やっぱり、この部屋からの送信は妨害されているのではないかと、という疑念が、受話器を戻した途端、再び湧いてきた。間違いない。なぜか僕は、そう信じてもいいという気分だった。じつと壁に向かってしていると、白い壁面がだんだん光り始め、ガラスとなつて透き通り、僕の顔が大写しになる。それも、左顔面のひきつれの痕が、これまでにならぬほど生々しく、柿色のぬめりを帯び、濡れている。

電話器を叩き付け、周りの配線を引き千切り、四囲の壁に向かつて殴り掛かりたい思いに、全身が震えた。

そのとき、信じられないことが起きた。背後で椅子の倒れる激しい音がしたと思った瞬間、部屋中の空気を裂き電話器のベルが鳴り始めた。しかも、デジタル表示の部分に

奈津子が、僕の意識の中で少しずつ変化し始めたのは、A T Tで、翠レディースマンシヨンの電話番号を知ってからである。コールのとき何度その番号をプッシュしようとし、思い止まったことか。あるいは横田や渡辺と飲んで別れた後、公衆電話ボックスに出食わずと、胸の内に焼き付いている番号を、指が叩き始めようとする衝動から、どんなに懸命の思いで逃れたことか。

であるから、そんなときには酔いまみれの頭を力まかせに殴り付け、電話ボックスのない道を選んで歩くのだった。僕には、\*印の付された番号をコールしてはならないとのA T Tの定めに縛られているという思いはそれほどないのであるが、奈津子の内にはどうしても踏み込み難いものがあった。

珍しいことに、最初のコールで契約が取れた。相手は若い男だったが、ちょうどK Tホンのことを局に尋ねようと思っていたと言ひ、すんなりOKをしてくれた。

しかし、その後はいつものペースになる。十回ずつのコールを繰り返して、リストに丹念に赤丸を付けていく。眠気を催しそうなほどの、きちんとした十回ずつのコールが続く。ひよっとして、この壁の外に発信出来たのは、最初の若い男との一度だけでしかなかったのではないかと、しかも

赤を点滅させ、ギリギリと絞め上げて来る。

僕は一瞬、自分の思いの中の火が天井に突き抜け、炎が全館にまわったのではないかと錯覚した。電話器の発する音は、火災報知器のものであった。受話器を取った。

「一過性の単なる衝撃によるものと判断されます。機器等全てに異常は認められません」

コンピュータの造るデジタル語が、一オクターブ高い音で流れた。何のことはない。この部屋そのものがコンピュータの管理下であり、僕の一挙手一投足が全てキャッチされ、リストアップされているということになるのだ。

久しぶりに、昼近くまで寝た。日曜日である。昨夜は、珍しく酒を飲まなかった。蛇口で口をすすぎ、顔を洗った。指で頬のひきつれの痕を軽く撫でる。

鏡は見えない。四畳半の部屋には、鏡と名の付くものはない。鏡の替わりになりそうなガラス製品もない。テレビ台のガラスも、とり外してしまった。机、コタツ、テレビ、本箱と、片手で数えられてしまう程度の家具が、それでも部屋の殆どの空間を占めている。

誰も来ない。横田も、渡辺も、花井も来ない。第一、彼らは僕のアパートを知らない。

たまに訪れるのは新聞の勧誘か、郵便配達ぐらいでしかない。その誰一人として、部屋の畳を踏んだ者はいない。

鎖のついたドアの内側から僕は応対し、十センチ以上ドアを開いたことがないからだ。

寝るときには、いつももう二度と目覚めることはない、という自分で定めたくだりを念じて眠るのであるが、曙光が射し始める頃になると、布団の中にいられなくなる。

重苦しいものに壓され、どろりとした気分のまま布団を出て、しばらくパジャマのまま机に座る。勿論、電気スタンドは灯さず、ノートや参考書を開くこともない。

それが何年ぶりにか、夜明けを知らずにいた。十二時間も眠っただろうか。いつも感じる気鬱さはなく、体の芯から何かが跳ね上がるうとする力さえ感じられる。

目覚める前、短い夢を見た。奈津子と僕は、オリエンテーションの日以来、ときどき言葉を交わす間柄になっていたのだった。

細部までは覚えていないが、僕が奈津子のマンションに電話をし、彼女もそれを待っていた。映画でも観に行かないかと誘うと、奈津子は映画を観ることなどすっかり忘れていたわと言った。奈津子は、一日も早く叔父の元から出たいのだという意味のことを、少しばかり早口で言った。

「叔父さんて、西海外科院長だろう。うらやましい限りだよ」

「何も知らないから、そんなことが言えるのよ。叔父には、私より二つ下の長男がいるわ。医学部志望だと、叔父の機

嫌は少しはましだと思っけれど」

「じゃ、君に期待してるわけ。外科医の後継にと」  
「全然よ。叔父を好きになんかなれないわ。叔父が私に望んでいるのは、叔父の秘書になるということ。後は、ご想像にまかせるわ」

奈津子は、深い溜め息をつきながら、かといって、理知的ないつもの彼女らしさを失わない口ぶりで言った。

僕が覚えていることはそこまでであるが、電話の間、自分の頬のひきつれが、いつの間にかなくなっているのに気付き、幾度も幾度も、受話器を持たない片方の手で左頬を撫で、これはひよつとしたら夢なのではないか、と首を捻っていたのを覚えている。

そんな夢のせいもあつてか、僕の心は軽かった。洗顔しながら頬のひきつれに指が触れても、あれは夢の中のことだ、これが現実の姿なのだ、と落ち着いて考えられる気持ちのゆとりがあつた。

昼食には、アパートから五百メートルと離れない定食専門の店を利用しているが、本屋に寄るついででもあり、いくらか足を伸ばしてみた気分でもあつたので、三十分近く歩いて、国道横のレストランに入った。日替わりメニューの中から、ハンバーグと野菜サラダを注文し、コーヒーも頼んだ。普段よりかなり値がはるけれど、ときにはこういう場所で食事をするのも悪くないと思った。気持の全体が、

心地よく高揚していた。

足を組み、組んだ足の上に肘を乗せ、左頬を包む恰好に手の平で覆った。そして、煙草に火を点けた。店はほどよい混み具合だった。流れている曲は、名前は知らないけれど、よく耳にするテンポのよい明るいものだった。

僕はハンバーグを片付け、野菜サラダも残さずたいらげた。そして、食後のコーヒーに手を付けた。そのとき、レストランの並びのブティックから女が出て来た。

奈津子だった。十メートル近く離れているから、確かにとは言えないが、僕のインスピレーションだった。

パンタロンにヒールの高い靴。束ねた髪。黄色のネックカチーフと、どれをとっても秀英学館で見る奈津子の姿とは違うのであるが、ブティックの前で待っている車のドアを開け、乗り込もうとする横顔には、まぎれもない奈津子の表情があつた。

運転席には、サングラスの中年の男。その赤いスポーツカーは、奈津子が乗り込んだかと思うと、鋭いエンジン音を残し、あつという間に走り去ってしまった。

僕はこれは幻でも見ているのではないか、と今朝の夢のことを反芻しながら、しばらくスポーツカーの去った後を、コーヒーカップを抱えたまま見詰めていた。

公衆電話ボックスを見付けると、飛び込んだ。僕の頭の

中に、呪文となつてインプットされている番号。あの福岡市東区の翠レイスマンション。A T Tから、絶対にコールしてはならないと言われている番号。それを、今の自分がコールすることは、何も不自然なことではない。そう思った。

何より、今コールしても、奈津子が出ないに決まっている。口中に湧いてくる唾を飲み下し、頭の中の呪文を指先で追った。

すぐにコールが始まる。二度、三度。四度目にコールは途切れた。

「暗唱番号を押してください」  
デジタル語である。黙ったまましていると、同じデジタル語が、同じ言葉を繰り返す。受話器をいったん下ろし、もう一度呪文をブッシュする。コールが始まる。二度、三度、四度。すつとコールが止む。今度は、前のときといくらか感触が違う。

「ください。暗唱番号を押して」  
デジタル語が中途から入っただけだ。僕はふつと溜め息をつき、受話器を下ろした。

空耳かと思っていた。ドアにノックの音がある。はじめ、戸外に吹く風の音かと聞いていたので、ドアの外の気配には気付かなかつた。ぱたり、と音が止んだ。すうつと気配

が遠ざかって行く。やっぱり空耳だったのかもしれない。僕は肢体をくねらせた女性が、淡い湖の佇まいの中に溶け込んで行く様を思い、寝そべったままその横顔を眺めやっ  
ている。

トンと、もう一度ドアが鳴った。続いて、小さく咳き込む声が出た。鎖のまま、僕は細くドアを開いた。

「少しだけ、お話ししても構いませんか」

奈津子である。僕は答えるより先に、鎖を外していた。どうして、奈津子が僕のアパートを。つい先刻、奈津子は赤いスポーツカーに乗り込んだばかりではなかったか。

「すみません。ほんの数分だけですから」

奈津子は、薄い冊子を取り出した。肩に掛かる長い髪。

色白の頬。首筋から肘へ掛けてのなだらかな華奢な線。どう見ても奈津子ではないのであるが、他を容易には寄せ付けようとしない、あのあくまでも隙のない奈津子の姿はそこにはなかった。

女は、一歩だけ部屋に踏み込んだ。微かに、化粧水の匂いが鼻先を掠めた。僕は反射的に後ずさった。

「私たちを造りたもうたお方を、知っていらっしやいますか」

女は、いくらか小首を傾げる仕草で言った。僕は何も答えない。この場にふさわしい言葉が、頭に巡って来ないのだ。女は僕の頬のひきつれに目をやり、ふっと視線を逸ら

した。その動きで、甘酸っぱい匂いが、また微かに散った。化粧水の匂い。獣の唸り。流れる汗。一本の火柱。肉のひしゃげる音。悲鳴。

僕が我に返ったとき、女は唇の端から一筋の血を流し、ドアを背に腰を落としていた。

「愛が、全てを、全てを覆ってくださいます」

女は、腰を浮かしかけ、よろめいた。そのまま、しゃがみ込み、散らばった冊子に手を伸ばそうと、横座りの格好でいる。

ベルが鳴っている。脳天に突き刺さってくる鋭さで、全館に響いている。

目がある。無数の目が、僕を覗いている。壁が光り始め、やがて鏡となり、僕の前額部から左頬にかけてのひきつれを、クローズアップで映し出す。

シャリシャリと、空調が音をはり上げる。虫たちの群れに似た、赤や青や黄の配線が、床を持ち上げ、壁を伝い、天井に這い上ぼろうとしている。僕の椅子が、横倒しに転がっている。無数の目が、笑っている。無数の目が僕の鼻先で笑っている。

「君には必要なんだよ。特に、君にとってはね。だから、俺はいつでも君の側にいる。ほら、ここにいますのさ。わかるだろう」

男の声だ。男が高めのトーンで、博多にわか面に似た笑いを浮かべ体を振って笑っている。

机の上には、幸福の詩がある。わずかに肢体をくねらせた、横顔だけの若い女性が、はるかに遠い湖を眺めやっ  
ている。湖には、青く、白い霧がたち、秋の風がゆるやかに吹き渡っている。

(了)